

美術作家

つくだ ななお
佃 七緒さん

今だから思いついたこと

展覧会がだめなら…

昨年春から夏にかけて、新型コロナウイルスの影響でギャラリーや美術館が臨時休館を余儀なくされ、多くのアーティストが作品をじかに観てもらえる機会を失くした。佃七緒さん(2020年度アーツサポート関西「岩井コスモ証券ASK支援寄金」助成対象者)も、3月に予定していた個展が10月に延期。たとえ開催したとしても、その作品は、直接手に触れて楽しんでもらうことを前提としているため、不特定多数の人が来る場で展示するにはためらいがあった。「展覧会がだめなら、個人の自宅や仕事場で観てもらえばいい」。佃さんは、展覧会の延期により生まれた時間で、作品を貸し出す『お家で展示プロジェクト』を行った。作品をプロジェクト参加者の自宅や仕事場に送付し、そこで展示・鑑賞してもらう企画である。

作品は、2018年5～6月にかけて、佃さんがスペイン・バルセロナ北部の山中にある築400年の古家「石積みの家」に滞在して制作したもの。かつて当家で使われていた釘や蝶番などの金具を、現地で調達した手漉きの紙に貼り付け、それを当家の台所や居間など18か所に置いて写真で撮影。遺棄されて錆びついた金具に「新たな居場所」を与え、撮られた背景を含めて「作品」とした。その作品を収めた写真集のあとがきには、「古い金属の部品が次の居場所へ出発する前の、長く過ごした家での記念撮影のようなもの」と記されている。「次の居場所」とは、古い金具が紙や枠をまとめて「作品」となり、それが購入などによって誰かの手にわたり設置されることである。佃さんは、写真に写った背景をイメージした木枠をつけ、9つの作品を準備した。

プロジェクト参加者に送られたのは、その作品である。プロジェクト期間は7月末までの1か月間。個展会場(ギャラリー佑英:大阪市西区)のオーナーの呼びかけもあって、同ギャラリーの常連客やアーティストたちが参加してくれた。佃さんは、「送り届けるといのはコロナ禍でなければ思いつかなかった。オーナーのご協力に感謝している」という。

新たな「居場所」で生まれる作品世界

スペイン滞在中から、「古家から作品として持ち出す金



個展「石積みの家との18+9通信」の作品。前の持ち主の展示場所をイメージした背景を付け、「石積みの家」での写真(P15下)も添えられた。(ギャラリー佑英)

具の代わりに、作品を通して何か別のものを古家に戻したい」と考えていた佃さんは、その考えをコンセプトとして組み込み、次に手にする人にある義務を課すことを含めて作品とした。それは、次の持ち主が自身の感性で選んだ「新しい居場所」に作品を置いて撮影した写真を、スペインの「石積みの家」に送り、金具の物としての存在の代わりにイメージで返却する、ということである。『お家で展示プロジェクト』での作品貸し出しの際にもその条件は実行され、プロジェクト参加者によって新たな背景を付加された金具の写真がスペインに送られた。

故郷スペインを離れ、大阪、兵庫、京都、神奈川の参加者の手に渡った作品が写真に撮られ、石積みの家へ届けられた。床の間の掛軸の前に置かれたもの、仕事場の机の上で私物と並んで置かれたもの、ビルの工事現場で働く人とのツーショットなど、中には写真集のようにして送られたものもあり、家主を驚かせたという。

また、佃さんは、作品が再び手元に帰ってきたとき、前の持ち主の展示場所をイメージした背景を付加することで、新たな作品化につながるのではないかと閃いた。昨年10月の個展では、佃さんの手でプロジェクト期間中に作品が置かれていた「掛軸」などの背景のイメージが足され、また新たな作品の世界を生み出していた。

アーティスト・イン・レジデンス

大阪府出身の佃さんは、2009年に京都大学文学部(倫理学専攻)を卒業後、京都市立芸術大学美術学部工芸科



スペインでAIRを行った「石積みの家」



作品の素材となった金具類(石積みの家にて)



スペインでの制作風景(同左)



「石積みの家」の台所の床に金具を置いて撮影(写真提供:佃七緒さん)

(陶磁器専攻)を経て、同大学院を2015年に修了。大学院在学中から海外でのアーティスト・イン・レジデンス(Artist In Residence: AIR)を中心に活動してきた。AIRとは、一定期間ある土地に招聘されたアーティストが、その土地に滞在して異なる歴史や文化を吸収しながら創作活動を行うこと、またはそうした活動を支援する制度をいう。佃さんは母校の非常勤講師を務めるかたわら、コロンビア、ペルー、アメリカ、スペイン、オーストラリアで創作と展覧会を行ってきた。滞在期間は短くて1か月半、長くて4か月。「土地の人がどんな道具を使って生活し、その日常の中でどんな出来事が起こるのかを知るのが好き」。佃さんは、そうして得た情報をもとに、現地で馴染んでいる素材を使って立体作品や空間を制作してきた。スペイン「石積みの家」の作品にも、そうした想いが貫かれている。「だから作品を日本に持ち帰ると、現地で繋がっていた背景を断ち切ってしまった気がして、現在日本にいる者としての視点で新たに手を加えている」という。

作家の思いを「翻訳」する

コロナ禍の拡大で海外渡航が制限され、昨夏以降、佃さんは国内にいる時間が増えた。それが「そろそろ次のことを」と考えていたタイミングと重なり、AIRの経験を活かした新たな企画に取り組むこととなった。

AIRでは、その申し込みや現地スタッフ、滞在先の生活者などに、自分のしたいことを言葉で説明しなくては何も始まらない。佃さんは、作家たちが各々の活動場所から移動せずにAIRでの経験と重なる場づくりを目指して、昨年7～12月、芸術活動支援施設である一般社団法人HAPS(京都市東山区)で、5人のアーティストと協力者との対話を通して行うアートと「翻訳」の企画『ALLNIGHT HAPS 2020翻訳するディスタンス』を主宰。作家が、必ずしも美術・翻訳を専門としない協力者を介して、制作・作品への考えを日本語から他言語へと置き換える過程を経験することで、作家にとっては次回作への準備につながり、協力者・鑑賞者にとっては作品や作家への関心を促す土台作りになればと考えた。さらに、そのプロセスを経た作家による展覧会シリーズも開催。今年3月23日まで、HAPSギャラリーにて夕方6時から翌朝9時半まで、屋外から鑑賞する展示が行われている。「このプロジェクトのために広報原稿を書いたり、ウェブでミーティングをしたりと、思ったより多忙な数か月でした」と佃さん。コロナ禍で移動が制限されたとはいえ、気持ちは常に外へ向けられている。

(ライター 三上祥弘)



写真(左)の背景をイメージした木枠や絵を付け、「お家で展示プロジェクト」の参加者のもとで新たな居場所を得た金具。10月の個展作品では、その背景も追加された(P15上)。

(写真提供：小野玲香さん／神戸三宮 Bar Le Bateau)